



## 水沼一郎

「幼児の教育」などという畑違いの専門誌からお呼びがかかり、これも連れ合いが幼稚園奉公をしている因縁かと、ブック・レビューめいた駄文を物する羽目とは相成りました。

演劇や映画の企画を生業なからわいとしていた関係上、人一倍本は読んでいるつもり。とにかく、新聞はスポーツ紙も含めて全日刊紙、それに全週刊誌から月刊文芸誌、書き下ろしの単行本もベスト・セラーは勿論のこと、およそ演劇や映画のネタになりそうなものはマス・コミ、ミニ・

コミを問わず、出来得る限り目を通し、同業他社に劇化権、映画化権を取られぬうちに原作者の許可を得て脚色、劇化、映画化するというのが企画部門の任務なのですから。

会社の小生のデスクの上には、新人、既成劇作家を問わず持ち込み、売り込み戯曲の原稿や、雑誌、単行本、連載小説の切抜きが、文字通り「山積」しております。読書マニアの小生にとって、いわば趣味と実益を兼ねた羨ましい仕事だと、友人に冷やかされることもまま

ありますが。

それでは最近読んだ本の中から二、三冊選んで小生流の御紹介をいたします。それも芝居や映画の原作小説などではなく、女性中心と想像される「幼児の教育」誌の読者にも興味のありそうなものをピックアップしてみましよう。

\* \* \* \*

元ビートルズのジョン・レノンが射殺されたと思つたら、レーガン大統領の暗殺未遂と、この所アメリカの荒唐、退廃を裏付ける事件が頻発しています。米国民に婦化して二十年余の女性が、福祉ケースワーカーとしての体験に基いて書いた『貧しいアメリカ』（岡田信子著、主婦の友社・八八〇円）は、アメリカに経済的のみならず精神的貧困が広く蔓延していることをレポートしていますし、『アメリカの狂気と悲劇』（落合信彦著、集英社・八八〇円）は、KKKに代表される黒人差別や組織暴力の核心に迫ろうと試みたインタビュー中心の本です。

もう一冊、ここに推薦するのが『ナルシシズムの時

代』（C・ラッシュ著・石川弘義訳、ナツメ社・二五〇円）です。これも病める現代アメリカへの診断の書であり、その社会状況や心理現象を、フロイトの精神分析概念であるナルシシズム（自己愛）をキー・ワードとして論評したものと言えましよう。

興味ある項目を挙げて見ますと、V、墜ちたスポーツVI、学校教育と新しい文盲 VIII、フィリングからの飛行——セックス戦争の社会心理——X、父親不在のパターナリズム、等々でしょう。J・レノンやレーガン大統領事件の犯人達が共に二十五才の青年であったこと、共に自閉的、内向的な性格であったことが、低次元な実例まで挙げて報道されていますが、これは、わが国でも土居健郎のロング・セラー『甘えの構造』や、小此木啓吾の「モラトリアム人間の時代」などが読まれている風潮と照応するものでしょう。

この父権喪失の時代に、かつてハリウッドで二流とは申せ西部劇スターであった保守派、タカ派であるレーガン大統領に一種の擬似父親的な虚像を見出し、自己愛的なイメージを投影して心の安定を願ったアメリカ国民は、「力の政治」を訴えるレーガン政権の成立を容認し

たわけです。こうした顕著な実例から見ても、「世界の警察」意識が裏目に出てしまったあのベトナム戦争での蹉跌以後、アメリカに自己愛的な人間、ナルシストが増加したことを歴史学者のラッシュは推論し、ナルシズムの精神から構成されているのが現在のアメリカだと述べています。

ポスト・ベトナムのアメリカの病理を、われわれは「タクシー・ドライバー」とか「ディア・ハンター」などの映画で手っとり早く見ることが出来ますが、政治のスペクタクル化、ラジカリズムさえも街頭芝居化してしまふこと、スポーツの墮落、英雄崇拜のナルシズム的な理想化、などの現象がこの書では分析されています。

また映画の引用になりますが、「結婚しない女」という作品が好評でした。あの中にシル・クレイバーク扮する離婚したヒロインが、孤独と欲求不満に耐えかねてセラピストに相談に行く件りがありました。あれなども現代の病めるアメリカを象徴する風景で、この書にも牧師や僧侶以上に現代人に心の平安を与えてくれる宗教以上の存在、セラピーについて述べられていて興味を惹かれます。

また、ナルシズムの時代にあつては、男女の性関係ですら本来的な人間の出遭いという性質を失い、役割演技的な性関係と男女間の性闘争にとって代わられていることが述べられています。これまた、かのエリカ・ジョング女史のベスト・セラ「飛ぶのが怖い」以来の「女性の自立」といった風潮、思想との関連で、「アニー・ホール」「ミスター・グッドバローを探して」とか「グッバイ・ガール」などの一連の「女性映画」によく描かれていました。

とにかく、著者がナルシストの生れる原因として挙げている社会の官僚制、情報社会化、父親の権威喪失などの風潮は、そのままそっくり日本にも当てはまることです。アメリカの自信喪失ぶり、内向的傾向を対岸の火災視することは出来ません。「エデンの東」の巨匠エリア・カザン監督は、「今のアメリカ人は、憂い顔した子供なんだよ。可愛い奥さんとテレビの前でビールを飲み、外には出たがらない。たまに大評判のSF映画だけを見に行き、そっとレーガンに投票する——」とポスト・ベトナムのアメリカ社会の幼児化を指摘しています。テレビの漫才ブームを見ていて感じるのですが、

世は挙げて、いわゆる「引き延ばされた幼時期」を送っているのかも知れません。

\* \* \* \* \*

「女性の自立」に関して、マーケティング・リサーチの資料に『シングルウーマン——OL市場の量的変貌と質的変貌』（坂本登編・ブレイン別冊、誠文堂新光社・一八〇〇円）があります。ここでいうシングルウーマンとは、未婚、既婚を問わず、また独身であれ、母親であれ、また有職無職を問わず、とにかく「一人立ちした」あるいは「自立した」女性の総称です。「ブレイン」という経営専門誌の別冊という一種の「臭さ」は感じられず、シングルウーマンをあらゆる角度から調査・分析し、現状からその将来像までを集大成したものであります。

たとえば、「シングルウーマンの生活意識と消費行動」という調査報告も面白いのですが、主として男性筆者による。IV、女性市場へのアプローチ、が興味津々でありました。「悩み模索するシングルウーマン——仕事と結婚についての意識を中心にした分析」とか「一人暮らし

の女考——その妻絶なる実態」「旅をする女の本音と建て前」「自立したい」意欲と各種学校」など、小生も会社の部下の女性やら、女友達の誰彼の顔を想像して驚いたり、思い当ったりしました。

下手な紹介よりも、それぞれのキャプションを引用した方が内容を判って頂けるかと思いますが、これらのデータを企業戦略の資料として利用する立場から見ると、「シングルウーマンは幻想である。幻想を清算する過程で真の姿が現れることを期待する」「スキップふうライブ体験と各種のメディア接触のなかで、実用的な生活情報を得ようとしているヨコ型女性たち」「自立した女のイメージと実際の自立度がキーワード。その兼ね合いを考えた戦略が重要だ」「マーケット化された存在として女性をとらえる、それが「女」にとって効果のあるクドキ文句となる」云々と、いささか皮肉たっぷりで刺激的なキャプションが目につきます。当の御婦人方がお読みになっても面白いレポートです。

\* \* \* \* \*

先程、アメリカの一連の女性映画を列挙しましたが、

その女性映画ブームの端緒となった作品に、社会派フレッド・ジンネマン監督の「ジュリア」があります。ヒロイン二人に扮したジェーン・フォンダとバネッサ・レックドグレイブという二大知性派女優の共演で話題になった作品です。これは、現在七十六才になるアメリカの女流劇作家リリアン・ヘルマンの回想録の映画化とも言えますが、彼女の戯曲の代表作は、名匠ウィリアム・ワイラー監督で、オードリー・ヘップバーンとシャリー・マックレーン共演で映画化もされた「噂の二人」(原題「子供たちの時間」)で、これは昨年夏三越劇場で、有馬稲子と南風洋子の共演で上演されましたから御覧の向きもあるかと思えます。そのリリアン・ヘルマンの自伝『未完の女』(稲葉明雄・本間千枝子訳、平凡社・一八〇〇円)もお奨め品です。

彼女の生い立ちに始まり、成人してからの出版社やハリウッドでの仕事を通してのヘミングウェイやフィッツジェラルド、フォークナーロスト・ジェネレーション作家達や、映画、演劇人らとの交際、スペイン戦争やソ連訪問の体験談等の日記も挿入され、際立って強烈な個性を持ち、赤狩りのマッカーシー旋風にもひるむことな

く、信念を貫き通した女流劇作家のドラマチックな回想録です。

その中でも、何回かの別居を挟みながらも三十年間同棲生活を送ったハードボイルドの推理作家で、「影なき男」や「マルタの鷹」などの名作を書いたダンセル・ハメットへの追想は、敬愛の情が色濃く点綴されていて読者の胸を打ちます。二人がお互いに自立し、お互いの才能を尊敬し合いながらの同棲生活には、清冽な印象さえ受けて感動的です。

全米図書賞を受賞したこの本の影響によって、ハリウッドの女優達の自伝、回想録のスタイルが一変したときえいわれている名著の御一読をお奨めします。

(松竹・企画芸文室)